

縄文時代の土製仮面に見られる歪みの造形 ——いわゆる鼻まがりの仮面について

池 田 進

Plastic style of the earthen masks in the Jōmon era ——So-called nose-distorted masks

Susumu IKEDA

Abstract

1. Several cases of masks with distorted noses are observed.
2. Archaeological research on those masks is reviewed.
 - (1) The nose-distorted masks came from remains from the latest period of the Jōmon era.
 - (2) The nose-distorted masks have been classified into 2 groups.
 - (3) Some points concerning the reason for the nose distortion are discussed.
3. Social and psychological meanings of masks in prehistorical age are inferred.
 - (1) Magical functions.
 - (2) Protecting living beings from Evil.
 - (3) Transformations.
 - (4) Avoiding the eyes of the Spirits watching living people.
 - (5) Social functions of masks in ancient religious events.
 - (6) Understanding of the style of the nose-distorted masks.
4. Various kinds of masks with face/nose distortion are displayed worldwide.

Key words: Mask, Earthen mask, Nose-distorted mask, Jomon era.

抄 録

1. いわゆる鼻曲りの仮面と呼ばれる特徴的な形状を持つ数例の土製仮面を実見した。
2. 鼻曲りの仮面についての考古学的研究の文献を展望した。
 - (1) 現存の鼻曲りの仮面は縄文時代の後期から晩期の早い時期に属すると考えられている。
 - (2) 土製仮面は2類に分類されている。
 - (3) なぜ鼻曲りの造形が現れたのかについてのいくつかの討論がある。
3. 先史時代における仮面の社会的心理的意義が考察された。
 - (1) 呪術との関連
 - (2) 悪霊よけ
 - (3) 変身
 - (4) 精霊の監視を避ける
 - (5) 仮面のマツリの社会的機能
 - (6) 鼻曲りの仮面の造形的意味
4. さまざまな歪みの仮面の実例を供覧した。

キーワード：仮面 土製仮面 鼻曲りの仮面 縄文時代

本報文は平成12年度関西大学学部共同研究費の助成を受けて行った研究の報告書である。報文の作成にあたってつぎの方々のご教示を得たことを記し、深甚の謝意を捧げる。
一戸町教育委員会 中村明央主事、東北大学文学部 須藤 隆教授、同大学院文学研究科 鹿又喜隆氏、青森県立郷土館 岩谷宏子氏、関西大学文学部 上井久義教授、同博物館 山口卓也主事（順不同）。

1930年（昭和5年）に岩手県蒔前（マクマエ）遺跡から出土した土製仮面（一戸町教育委員会所蔵）は鼻曲り型土製面としてよく知られていて、1994年（平成6年）に国の重要文化財の指定を受けた。

蒔前遺跡出土のこの遺品を含めて全部で5例の、意図的に形を歪ませて制作したと思われる土製仮面がわが国縄文時代の遺跡から発掘されている。

これらの土製仮面をめぐっては、とくに最近、考古学の立場で活発な研究がおこなわれているが、本稿では、なぜそのような特有の歪みの造型が先史時代においてあらわれたのかという疑問を、心理学の視点から考察する。さらに、そのような歪みの造型は時代と地域と仮面の目的・ジャンルを超えて多数存在するので、その一部を手もとの資料によって供覧することにする。

I. 歪みの仮面——5つの事例

1. 蒔前遺跡出土の土製仮面（図I-1）一戸町教育委員会所蔵

京都国立博物館（編）『古面』（1982）に掲載されたこの遺品の写真（B6 無彩色）は技術的に非常に高度なもので、その画像は粗放で怪奇な迫力を強く印象づけている。

しかし、その写真や解説記事などから思い描いていた仮面像に比べて、最初にこの遺品に直面したときの印象は、思ったよりもこれは小振りだなということと、奇怪ないかついという感じはなくてむしろ繊細で可愛いというものであった。そのような感覚は、見た目の形からのものに併せて、持ち上げたときの薄さと軽さと、焼き締めた生地意外に穏やかな肌触りからも来るもののように思われた。



図I-1 蒔前遺跡出土の土製仮面
一戸町教育委員会所蔵
左3/4 やや下から見上げる角度で撮影

イ. 仮面の大きさ

最大長 18.0cm

最大幅 11.3cm

重量 358g

顔に当ててみるとかなり小さくて目穴の位置もずれる。鼻梁の最高部位までの高さが約60mmあって裏面を顔の形に沿うように窪ませているので、着けて動くことができないことはない大きさと形だが、右の紐穴には後に示すような理由で紐を通すことができないので実際に装着することは不可能である。

ロ. 表面の状態

生地の肌目はやや粗くて褐色をしている。額部分の表面に薄い朱色、右頬の部分にもさらに薄い朱色の彩色が残っている。焼成後に何かの樹脂をうすく掃いたものかもしれない。比較的高温で焼成したように思われ、鼻梁や眉の部分などに何箇所かの罅入がある。

左の額の上の一部が斜めに欠損している。顎部がないが、はじめからつくりつけていないように思われる。

目穴をくり抜いていて、くり抜いた筈あとがそのまま残っている。

眉と鼻は貼り付けていて、細く長く畝状にはっきりとしている。鼻の先端に鼻孔を穿っている。

両頬の部分にみみず腫れ状の縦皺の装飾がある。

紐穴は直径約5ミリで、左こめかみの紐穴は貫通しているが右こめかみの紐穴は貫通していない^(註1)。

ハ. 歪みの状態

仮面をほぼ正面から撮影した画像から輪郭線を抽出して顔の歪みの特徴を観察した(図I-2)。

顔全体の輪郭は、眉の高さのあたりから下の部分が向かって左方向に、ついで鼻翼の高さのあたりからふたたび右方向にと、うねるように形成されている。

(注1) 仮面の右側の紐孔が貫通しないままの状態は今私たちの目からするととても不思議な感じがする。外面からかなり丁寧に掘りはじめた孔がなぜ途中で止まっているのか。粘土に孔を穿ける作業にはたいした面倒もないであろうのに、その作業が途中で放置されたのはそれなりの理由があったのかもしれない。次章で再度触れることになるが、この種の土面について最初に言及した佐藤伝蔵(1897)や坪井正五郎(1898)は、もともと顔に装着するための仮面は木製か布製のものが存在していて、土製の面はその複製であると読めるような記述をしている。そうだとすると、土製面は顔に装着するものとしてではなくて、何かの他の目的のために作られたものになる(後述)。あるいは、磯前順一(1994)はこの現象を紐穴の消失傾向を示す微標とみなして、次に述べる鶯宿遺跡出土の土面のタイプから時前出土の土面のタイプへと様式が移行する時間関係が示されていると考えているが、金子明彦(2001a)による反論もある。この点については後に述べる。

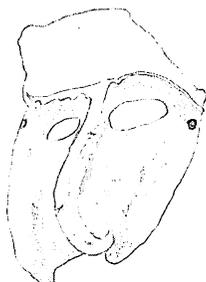


図1-2 蒔前遺跡出土の土製仮面
正面から撮影した画像の輪郭を強調して抽出

両目の大きさと高さが左右で違っている。そのため、右の紐穴は右目の目尻よりも上に、左の紐穴は左目の目尻よりも下に穿たれている。

眉は左右がつながっていて、右眉は右目穴の上方では直線的で、眉尻にかけてがこめかみ部分ではね上がっている。左眉は中央部が引き上げられた後、左目穴に沿うように眉尻が曲がって下がっている。鼻筋は逆S字状に強く湾曲している。眉から両目の間は鼻梁が潰れたように左目に向かってやや左に傾き、その後いったん右にまがったのち左にまがって左の鼻翼にあたる部分の先尖が鉤状に上に向かっていている。口は顎の部分がないので上唇の形しかわからないが、左の口角が上に強く引き上げられている様子を窺うことができる。

蒔前遺跡はJR東北本線一戸駅（岩手県二戸郡一戸町）の北約1.5キロ、南北に流れる馬淵川東岸の川床から10メートルたらずの平坦な段丘の上（標高120m～130m）に広がる縄文時代晩期の遺跡である。同遺跡からは「亀ヶ岡文化」の版図に属する縄文時代晩期前半（約2500年～3000年前）の土器類を多く出土している。

同遺跡についての最初の文献は明治30年に見られるが、大量の土器が発掘されはじめたのは昭和年代にはいつてからで、殊に昭和5年に大規模の桑畑の造成工事を期に、ほとんど盗掘にちかい非組織的な発掘による土器ブームがあったようである。

現在、一戸町教育委員会が所有し岩手県立博物館が管理している同遺跡出土の重要文化財指定品は、土器類が、鉢形土器、台付鉢形土器、深鉢形土器、注口土器、壺形土器、皿形土器、香炉形土器など158点、土製品類が、土面、土偶など20点、玉類が1点、石器・石製品類が、石斧、石剣、搔器など74点、合計253点となっている（一戸町教育委員会、1995）。

この仮面が発掘された場所（図I-3）は旧国道4号線に面した一戸町商工会館の敷地



図 I - 3 一戸町周辺地形図
国土地理院 5 万分の 1 地形図
「一戸」より

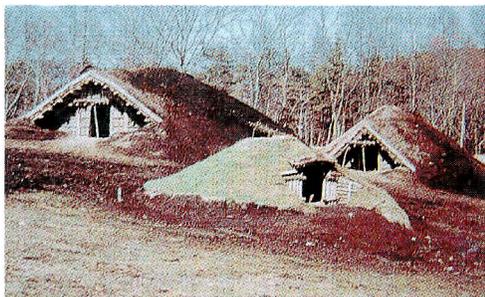


図 I - 4 御所野遺跡住居跡
復元された土屋根住居
一戸町教育委員会（パンフレット）
『縄文の里——御所野遺跡』より

付近（正確な出土場所および出土状況は不明）である。そこからは多量の土器が出土したので使用済みの器物の集積場所だったのではないかと推測されており、仮面は、祭祀のあとにそこに運んで埋められたものと思われる。

さきにも述べたようにこの遺跡は川床からさほど高くない段丘の上に位置しているので、わずかに地面を掘り下げただけで水が滲みだすような場所だという。したがって、当時の日常の生活の場はそこにはなく、もっと居住に適した場所にあったはずである。

蒔前遺跡から最寄りの住居址の一つでありもっともよく保存整備されている集落は、そこから南南東へ3キロばかり隔たった御所野遺跡（蒔前遺跡よりも古い縄文時代中期の遺跡）である。

御所野の一带はもともと一戸町が買い上げて工業団地として開発する予定であったが、事前の調査で大規模な集落址があることがわかり、本格的な発掘調査の結果、平成5年に国の史跡に指定された。そのために、約6万平方メートルにおよぶ広大な集落遺跡が開発の侵蝕をうけずに組織的に発掘・保存され、当時の生活の場の構成を総合的に把握することができるようになった。

集落址は周りを落葉樹の林に囲まれた標高200mほどのゆるやかな台地の上にひろがっている。ムラの中央部に一段掘り下げて整地した墓域があって、墓域の方向に出入り口を向けた土屋根の家屋群が広い範囲に散在していた。復元保存された家屋（図 I - 4）の戸

数は8棟で、さらに何棟かの復元が近く完成する。人口はおよそ百数十人から二百数十人程であったと推定されている。墓域ではいまでも発掘が続けられていて、殯屋ではないかと推定される建物跡が確認されている（一戸町教育委員会発行パンフレット参照）。

周辺の台地の上にはおそらくこれと同じようないくつかの集落が展開していたであろうと想像される（御所野遺跡の西側には、御所野と同じ縄文時代中期の馬場平遺跡やその他の集落址があり、さらに南方へかけては、蒔前遺跡と同時代の野里遺跡、下村遺跡、山井遺跡がある）。仮面の存在は、このような地理的社会的環境のなかに位置づけて理解される必要があるだろう。

2. 鶯宿遺跡出土の土製仮面（図I-5）天理参考館所蔵

鶯宿（オウシュク）遺跡出土の土製仮面も鼻まがりの仮面の一つの典型である。しかしその様式は蒔前遺跡の仮面とは異なっていて、蒔前の仮面がまさに縄文時代の遺品らしい土着の温かみのようなものを持っているのに対して、この仮面はむしろ、ガンダーラからメソポタミアあたりの文物を連想させるような、いわゆるバタ臭い雰囲気を持たせている。

歪みの状態は、蒔前の仮面のように顔全体が粘弾的に歪むのではなく、鼻だけが明快な円弧を描いてまがっている。



図I-5 鶯宿遺跡出土の土製仮面
天理参考館所蔵
京都国立博物館，1982. p.205, 図版215.

イ. 仮面の大きさ 12.5cm

ロ. 表面の状態

口穴の上縁から下の顎の部分と鼻梁の下半分が欠失している。欠失した鼻梁の先端部分の剥落痕を明瞭に認めることができる。

生地の色は黄色みがかった灰白色である。表面は蒔前よりも滑らかでわずかに光沢

がある。手に持っていないのでわからないが、蒔前よりも厚くて持ち重りの感じ。眉と鼻は貼り付けている。眉の中央に鼻が直接につながっている。

眉は左右がつながった一筋の隆起になっていて、盛り上がった頂部を平たくし、篋で短い間隔で30本ばかりの縦線の刻みをいれて装飾している。この装飾は、大同遺跡出土の土偶など、若干例に見られる眉の装飾の仕方と同型的である。

眉の下縁の面と鼻梁の両側の面は、眉・鼻の頂部の平面からほとんど垂直の壁状に落ち込んでいるので、眉・鼻の輪郭はシャープなエッジ状をなしている。眉下面と鼻の両側面の壁は目穴のレベルまで深く落ち込んで、そのため、顔貌がいわゆる上脛が見えない奥目の形になっている。目穴が相対的に大きい。このような造型が東方的な印象をもたらす主な原因であろう。

目穴と口はくり抜かれて縁が丁寧に指先でならされている。

貫通した紐穴が眉の高さの両脇にある。全体に小さいが装着可能。

ハ、歪みの状態

顔の輪郭はほぼ対称、両目穴の大きさと高さも揃っていて、鼻筋だけが左頬の方に極端にまがっている。両眉の下縁から鼻筋の両側へ繋がる稜線は、幾何学的な簡潔な曲線をなしている。まがった鼻全体の形は先端部が欠失しているのでわからないが、剥落痕はそのまま弧を描いて左目の中央部の下に達している。

鼻筋のまがりに応じて口の位置が左に偏っている。

3. 上尾駮遺跡出土の土製仮面（図 I - 6）青森県立郷土館所蔵

1976年（昭和61年）7月に青森県六ヶ所村上尾駮(1)遺跡C地区（カミオブチ）で青森県教育文化課の発掘調査によって縄文晩期大洞C1～C2式の土器とともに出土した。出土場所は20基ほどある墓坑のうちの1基から5～6m離れた地点で6片に割れた状態で発見された。破片はのちに接合された。最近、欠失している部分を推定復元したレプリカが作製されて六ヶ所村立郷土館で展示されている。

イ、仮面の大きさと状態

原資料は左目穴の下縁から鼻梁の左側に沿って右頬の下半分へとつながる、全体のほぼ半分が欠失している。残った部分の大きさは、縦14.0cm、横15.4cmで、最大厚は1.3cmとなっている。材質の色は、赤みがかった褐色をしている。手触りがテラコッタのように粉っぽく、ずっしりと重い。両脇に紐穴がないし、この重さでは着けて動くことは難しいといわねばならない。

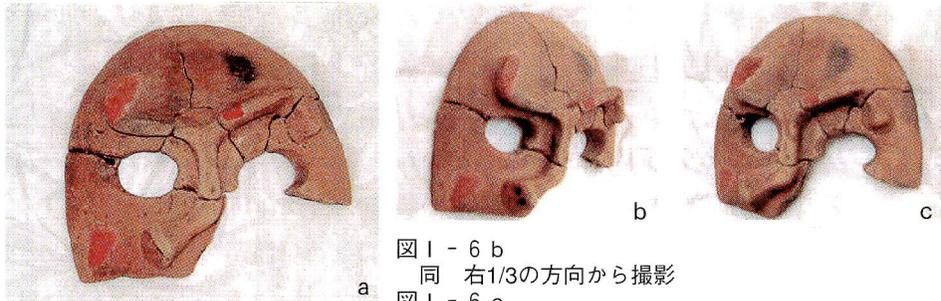


図1-6 a
上尾駮遺跡出土の土製仮面
青森県立郷土館所蔵

図1-6 b
同 右1/3の方向から撮影
図1-6 c
同 左1/3の方向から撮影

両目穴は楕円形でほぼ同じ高さの位置に、やや吊り眼ぎみに穿たれている。眉・鼻の隆起は高く、上面が平たいので角ばっている。鼻孔あり。

額の左側寄りに青味がかかった黒、右眉の折れ曲った部分から先全体と左眉の中程の上面および右頬の部分に朱色がかかった代赭色の彩色がある。この彩色とその配置が、材質の手触りと色あいや明快な造形とのバランスで明るい華やかな印象を与える一つの理由になっている。

ロ. 歪みの状態

眉と鼻はつながっていて、鼻は全長の約1/2程の位置から先が、左右の眉は両端の1/3ほどが時計回り方向に折れ曲がっている。他の4例の眉・鼻が有機的に湾曲しているのに対して、この事例の眉・鼻は機械的に屈曲しているのが特徴である。

両目穴はほぼ水平で、口の位置や形状はわからない。(六ヶ所村立郷土館に展示されているレプリカでは楕円形の口穴が左口角上がりに歪めて穿たれている。)

六ヶ所村上尾駮周辺の景観は、数m程度のあまり高くはない松や広葉樹におおわれて東方の太平洋岸と南方の尾駮沼にむかって開けた、標高40mほどの緩い傾斜の台地になっている。遺跡自体は日本原燃などの原子力施設の下に埋もれてしまっている。

4. 平貝塚出土の土製仮面 (図I-7) 慶応大学所蔵

青森県三戸郡名川町平貝塚出土とされているが出土状況等は不明である。所蔵は慶応大学民族考古学研究室であるが、青森県立郷土館に貸し出されていて上尾駮遺跡出土の土製仮面とともに展示されている。

イ. 仮面の大きさと状態

割れた2片の部分が接合されている。右こめかみ、右目穴の右下縁から右頬、鼻下、



図 I - 7 平貝塚出土の土製仮面
慶応大学民族考古学資料室所蔵

左頬左外側をつなぐ線から下の部分が欠失している。また、頭頂裏面の縁が剥がれ落ちていたので、表側から見た頭頂部は不整形になっている。残された部分の大きさは、縦10.5cm、横12cm。眉と鼻も剥がれて欠失しているが、剥落痕が明瞭に残っている。厚みは薄く、色は黒褐色で、堅く焼き締められていて軽い。両目穴は横長の楕円でやや吊り眼に穿たれている。左側の顴骨付近に貫通した紐穴がある。右側は欠失していて不明。

ロ. 歪みの状態

剥落痕から判断して両眉は太くてほぼ水平につながっている。鼻は眉につながっていて、両目の間を真っ直ぐに下垂してから向かって右方向に湾曲して、左目穴の中央部真下に達している。口部の状態はわからない。

5. 出土地不明 東北大学文学部所蔵の土製仮面（図 I - 8）

この仮面は以前は雨滝遺跡出土とされていたが、1982刊行の東北大学文学部『考古学資料図録』では出土地不明となっていて、本報文ではこの記述にしたがうことにする。

実見した仮面の印象は、図録の写真（同『図録』第2巻, p.64, J768）から想像していたのとは違って、中高の球面状にコロんとまとまらずいぶん小さく感じられた。しかし、やや厚手に堅く作られているので持ち重りがする。手触りは滑らかで、柔らかな色調。額は狭くて面長。目が垂れ目で大きく、口が小さいので可愛い。すこし間の抜けたのんびりした雰囲気漂う、そんな表情をしている。

面を顔に当てると、目穴が大きめであることと、自分の目と目穴との間に距離がある（面部が中高なので）ことのせいかして、広い視野が得られる。

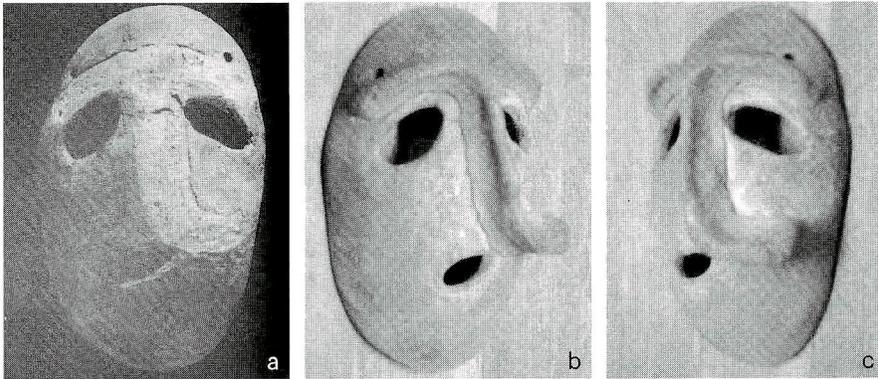


図1-8 a 東北大学所蔵の土製仮面 出土地不明
東北大学文学部『考古学資料図録』第2巻. p.64. J768.
b 同 眉と鼻を復元 右1/3の方向から撮影
c 同 眉と鼻を復元 左1/3の方向から撮影

イ. 仮面の大きさと形状

大きさは縦17.0cm、幅10.5cmで、全体の形はほぼ楕円形。眉と鼻が全て欠けている以外は完型。眉と鼻は一体構造で作って本体に貼り付けたものが剥がれ落ちたものと思われる。欠けた眉と鼻の部分の痕跡がやや灰白色がかかった色で残っているので、剥がれ落ちた跡をはっきりとなぞることができる。鼻の痕跡は鼻梁の幅が広く、鼻端までがほぼ同じ太さで象の鼻のような感じ。欠失した眉と鼻は復元されて、とりはずしができるようになっている。

生地は固く焼き締められていて、黄褐色で滑らか。表面に付着物はない。楕円形の目穴と口をくり抜いて縁はよく均してある。左右の眉尻の上部の額の部分に紐穴がある。

ロ. 歪みの状態

眉と目は左右とも下がり眉、下がり目で、同じ高さの位置に付いている。鼻筋の痕跡は、眉の位置からほぼ垂直にさがってきて、面部の真ん中あたりの位置で向かって右方向に緩く湾曲しはじめ、鼻の下部1/3ほどが急に曲がって左目尻の真下あたりに達している。杏の核状の楕円形をした口は全体が向かって左側にずれて左口角がほとんど顔の正中線上にあり、向かって左下がりになっている。面部は蒔前遺跡のケースと違って輪郭の歪みはない。

II. 土製仮面の研究史

1. 土製仮面の出現の時期について

土偶が縄文時代の全期間を通して見出されるのに対して、土製仮面が現れるのは縄文時代後期の終わりから晩期の早い時期になってからであるとされる。そして、縄文晩期になると、顔に仮面を着けた仮面土偶が現れ始める。そこでもし、仮面土偶が仮面をつけている人物の模型だと仮定すると、この3者の出現の時間的關係は、仮面が何かの機会に特定の人物によって実際に着用されていたものであることを示唆しているのではないか。

現存の仮面土偶が着けている仮面の形は、東京大学理学部所有の2体の事例では、様式は異なるがいずれも縄文時代の土面のように具象的である。いっぽう、長野県辰野町郷土美術館所有の1体が着けている仮面の相貌は極めて抽象化されている。最近に長野県茅野市で発見された縄文時代後期の土偶が着けている仮面は、報道写真で見るとさらに抽象化されてカマキリの顔のような形である（2000年8月29日付け毎日新聞30面参照）。

土製仮面が縄文時代後期よりも以前に見つからないということは、かならずしもその時代に仮面がなかったということの意味するものではないという考え方がある。革や布に目孔や口鼻の部分を開けて覆面とし、やがてそれに土で作った鼻や耳をとりつけて仮面としたものが作られていたらしい。その推論にはいくつかの根拠がある。まず、鼻・耳・口の土製品が単独で出土すること、それらには2ないし3個の小さな孔が穿たれていて紐で覆面に固定できるようになっていること。そして、或る1体の大型の土偶がそれと同じ様式の鼻を付けているという事実である。その大型土偶は盛岡市萩内（シダナイ）遺跡で発見された（頭部と右脚部が出土）。

復元結果の様相からその土偶は仮面土偶であることがはっきりした。推定された土偶の全長は100～120cmという異例の大きさであった。そして、その大型仮面土偶の鼻は同遺跡から出土していた2点の土製の鼻とほぼ同じ大きさで形であった。耳と口もまた、大迫町立石遺跡や北上市八天遺跡から出た土製の耳（3点）や口（2点）とほぼ同じ大きさで形であった。等身大より少し小振りのそのような仮面土偶が付けている鼻・耳・口が、単独に作られた土製の鼻・耳・口とほぼ同じ形状であったということは、それら単独の土製品が果たした役割がどのようなものであったのかを推測させる根拠となる。すなわち、鼻・耳・口の単独の土製品は、実際に人が着用する革または布製の顔覆いにとりつけて仮面としたその部品（部位型土面：組合わせ型仮面とも呼ばれている）であることが明確である（岩手県埋蔵文化財センター，1981）とされている。

2. 土製仮面の類型について

土製仮面について最初に触れたのは明治30年の佐藤伝蔵（1897）である。佐藤はこのとき「覆面」という用語を用いて、仮面土偶と、それが着けているのと同じような仮面が独立に存在することを指摘した。

「貝塚土偶の中には其目口等眞の者としては餘りに異様なる、其顔の周圍に一段の高まりあるか如き明に覆面の有様を示せるものあり。當時已に覆面の風習ありたりとせば豈に覆面を摸せる土器なからんや。彼の普通の土偶より薄く、且つ單に頭部而已にして完全軀なるものは恐らくは此覆面の積りなるべし。（p.490）」

「覆面」と区別して「仮面」という語を学術用語として定着させたのは、翌明治31年の坪井正五郎（1898）である。

「實に佐藤氏の言はるる通り石器時代土製品中には人の面部丈を薄く拵へたものも有り、土偶の形を具へて居て面部丈を別段に高くして有るのもござります。此薄く出来て居る面部は假面の摸造、彼様な面部を有する土偶は假面を被ぶった人物の摸造と考へられますが、其假面の現物は恐らく木とか土器とか云ふ様な堅い物質で作ったので有らうと思ひます。私は彼様な堅い物質で作った面形の物計りを假面と名付け、革とか織り物とか云ふ様な柔い物質を以って作った面覆ひをば覆面と呼んで居りますが、石器時代には兩方共に示した物が有ると信じます。（p.62）」

そして、坪井は11例の土製品を分類して

土製仮面現物	1例
仮面を被った形の土偶	4例
仮面の模造	4例
仮面を模した把手	2例

とし、機能面から、被り仮面（Mask）、当て仮面（Maskette）、飾り仮面（Maskoid）の3つの類型を識別している。

被り仮面とは、顔面に被って覆い隠し、通常は覗き穴と呼吸孔をうがっている。当て仮面とは、顔面全体を覆うのではなく、額などに取り付けるもので覗き孔、呼吸孔は普通あけられていない。飾り仮面とは、マスクに似ているが顔には着けないもの。

昭和8年には甲野 勇（1933）が形状の特徴によって3つの類型を識別している。甲野の3類型は、坪井（1898）の、被り仮面、当て仮面、飾り仮面の機能的類型に対応すると思われる。

すこし時代がさがって昭和40年代にはいと、江坂輝弥（1974）が機能面と形状面から

土面を分類して6類型（下位類型を加えると9類型）を指摘しているが、その分類基準は交雑していて明快とはいえない。

八賀 晋（1982）は江坂（1974）の分類を参考にしながら4類型を指摘した。

すなわち

- | | |
|-----------------------|-----|
| I. 耳・鼻・口の単独の土製品 | 4例 |
| II. 目穴・口穴を穿ち、紐穴をあけたもの | 13例 |
| III. 目穴・口穴を穿たないもの | 7例 |
| IV. 円板状の土版化した小型製品 | 6例 |

八賀によれば、Iは布作面や蔵面のように布か革で顔を覆ってそれに顔を画くかわりに、土製の部品をとりつけて仮面としたもの。IIは顔面に直接に付けて使用したと思われるもの。IIIは装着の方法がIIとは違う。小型であるので額に取り付けたと思われる。このIIとIIIはその表情や大きさや裏面の構造からさらにいくつかの類型化が可能だとしている。

類型IIとIIIに属する鼻まがり型の土面の表情については、甲野（1933）が蒔前遺跡出土の1例に簡単に触れており、大塚和義（1975）が蒔前遺跡、鶯宿遺跡、平貝塚、雨滝遺跡（『東北大学文学部考古学資料図録』（1982）では出土地不明）出土の4例に触れ、後に磯前順一（1994）が、上尾駿遺跡出土の1例を加えた5例の仮面を2類に分類している。

磯前によれば、第1類は円形に近い外形をしていて目と眉の湾曲が少ない。鶯宿遺跡と平貝塚出土の例がここに属する。第2類は顔が面長となり鼻が長くなって湾曲の程度も大きく、残りの3例がここに属する。さらに磯前は両類の関係を形式の比較によって推測して、時系列的には第1類が第2類に先行するとみなしている。

これに対して金子明彦（2001a）は、遮光器型土面の特徴との比較から第1類の方が第2類よりも新しいと推論できるが、いずれにしろ、観察できる事例があまりにも少ないので時期的な関係を確定するには無理があると考えている。

3. 仮面の歪みの形状をめぐるいくつかの解釈

(1). 幻覚仮面

甲野（1933;1964）は蒔前遺跡の仮面の歪みの表情について、この仮面が、

「・・・大きさも面としては稍小さいが、實用に適しない程のものでもないから、實際に之を被ったかも知れない。殊にその異様な表情から想像すれば神秘的な假面舞踏の行はれた事も窺い知る事が出来よう。（1933,p.27）」

とし、北米大陸やシベリア地方の先住民の祭祀に関連づけながら、

「・・・顔面全体のゆがみは、顔面神経が痙攣を起こしたその瞬間の表情にほかならない。おそらくこれは縄文時代のシヤマンが、神憑りしたときの容貌をあらわしたものでろう。(1964,p.173)」

と述べている。

大塚(1975)は、仮面の歪みの形が偶然につくられたものではなくて、幻覚剤による視野の歪みを写し取ったものという仮説を提示した。彼は石狩地方から積丹半島にかけて出土するオロシガネ状土製品と小型の石皿に注目している。それらの器物は植物性の毒物をすりつぶして調合するのに用いられ、それを服用して幻覚をひきおこす風習が縄文期にはあったとする考えで、仮面は幻覚をおこして

「・・・朦朧状態になった眼をとおしてみた<ゆがんだ世界>における仲間の顔をそのまま忠実にあらわしたもの・・・(p.151)」

で、彼はそれらを「幻覚仮面」と呼んだ。そしてそれらの仮面は、それを被った者にとっては幻覚者への変身であり、それを見る者にとっては仮面に表現された者になりきる効果を持つものであるとした。

また、八賀(1982)はイロクオイ族の疾病駆逐の舞踏(次項(2)参照)に使われる歪みの仮面との関連で、縄文の鼻まがりの仮面も病気の流行か何かの危機的状況に対処するために始まり、やがて定型化した舞踏の形として一定の行事の中に定着していったと考えている。

江坂輝弥(1964)は、このように仮面が実際に被られて何かの祭祀や舞踏がおこなわれた可能性を認めながらも(p.141)、これらがシャーマニズム的な宗教儀礼に関連があるのかどうかについては立証できる資料がないので、現段階においてはそのような仮面が存在するという事実を紹介するに止め、それを解釈するには狩猟・漁撈・採集の生産段階で到達した最も高度な文化的環境の下での社会的な背景を理解する必要があることを指摘している(p.144)。

(2). イロクオイ族の歪みの仮面

北米大陸では植民以前の1500年代に、先住民のモホーク、オネイダ、カユガなど6つの部族が団結してイロクオイ族と呼ばれていた。彼らは呪術で病気を癒す結社(False Face Society)をもっていて、呪医は顔に仮面を着け手に亀の甲羅のガラガラを持った図Ⅱ-1に見られるような姿でたちあらわれる。その仮面は同図に見るとおりの歪みの仮面である。なぜそのように顔がゆがんでいるのか、それについてはイロクオイ族の神話はその詠を語っている。



図II - 1 カユガ族の仮面舞踊（撮影1907年グランドリバー居留地）
Museum of the American Indian Feder, N., 1973, p.146, Plate 179.

天地を産み出した精霊が自分がつくった世界を眺めているとFalse Faceが近寄ってきて言った。「この天地万物は私が創ったのだ。」そこで精霊は、その証拠に山を動かすことを求めたが、False Faceはせいぜい林と大地をぶつけ合わせるばかりで山を動かすだけの力はなかった。精霊によって峡谷に閉じ込められたFalse Faceは、誤って断崖にぶつけて顔をひん曲げてしまった。かれはそこで精霊に命乞いをして、「今後は人間の災厄をやわらげるように尽くします」と誓った。それ以来、False Faceの顔はまがったままである。これが、イロクオイ族の仮面 False Face Maskが曲がっている理由である（図III - 1と図IV - 5aも参照）。

森の中ではガラガラの音がして突然False Faceが現れる。これに遇った人はすぐにシャーマンのところに行って指示をうけねばならない。シャーマンは結社の誰かに頼んで森でみたFalse Faceの仮面を彫ってもらうよう彼に指示する。彫り手は生木にじかに仮面を彫って祈りを捧げると、仮面に乗り移ろうとする霊が姿を現してくるのでそこで仮面をえぐりとりて色をつけ、毛髪を飾りつけて完成し、そして結社の長老が祈祷をして仮面に霊力を与える。

こうして歪みの仮面 False Face Mask は病魔の調伏に効力を発揮するのである（ベドウアン,1963）。

(3) 「フジル」の伝承と歪みの仮面

鳥居龍蔵は昭和8年に「北千島アイヌの仮面」と題する論文を発表し、「Eturatuki」と称する歪みの仮面（図II - 2）の意義を北千島地方の「フジル」の伝承に関連させて考察した（鳥居,1933）。

フジルは北千島アイヌの民間伝承である。フジルは目には見えないが人間の形をしていて、夜になると仮面を被って姿を現し人に危害を加える。その仮面は北千島アイヌがつくる仮面と同じものなので、それを被ると人なのかフジルなのか見分けがつかなくなる。そこで北千島では、夜にその仮面を被って人を脅す風習がある。北千島の歪みの仮面はそのような風習の中に位置づける必要がある。

伝承によると、フジルの故郷はカムチャツカで、一家眷属がいくつかの竪穴の住居に分かれて人と同じように生活しており、夜になるとここから北千島の島々に現れた。

あるとき数人のアイヌがカムチャツカに猟に行った。一人のアイヌが獲物の鹿を持ったまま穴の中に落ち込んだ。見るとそこはフジルの頭領の住まいでたちまち捕らわれて両目を松脂で閉ざされてしまった。そのうち彼らがどこかにでかけてしまったので、その隙に鹿の脂で目を開き脱出に成功した。そのとき住まいの中に頭領の宝刀があったのでそれを取って逃げたが見張りのフジルに発見されてしまった。追いつかれて捕らわれそうになったので、アイヌは腰に差した自分の太刀を投げ渡すと、見張りは宝刀を取り返したと誤って行ってしまった。こうして分捕ってきた宝刀をアイヌは大切にしていたが今はない。いつの間にか無くしてしまって惜しいことをした、という話である。



図II-2
北千島アイヌの仮面
「Eturatuki」
鳥居龍蔵, 1933, p.34.



図II-3
アラスカ先住民の仮面
ポイント・ポーブ、ティガラ遺跡出土
梅棹忠夫・木村重信, 1981, p.116, 284図

鳥居によると、北千島の「Eturatuki」はカムチャツカのコリヤーク族の「Reki'nniki」という仮面によく似ているという。このことは、北千島の仮面がフジルの被る仮面と同じだということ、そして、フジルがこれを被って北千島に現れるという伝承とよく符合する。鳥居はさらに、Reki'nnikiが隣接する地域のイヌ・イトの間に伝わる仮面にもよく似ており（図II-3に一例：アリュシャン列島へ続くアラスカ半島中部のポートモラーで、

3000年前の鯨骨製の仮面が発見されているので、縄文晩期とほぼ同時期にイヌ・イットもまた仮面文化を持っていたことがわかる)、そして、東北地方にもまた歪みの仮面が存在することに注意を喚起しているが、解釈はおこなっていない。

もしもこれら一連の仮面に関連性があるとするならば、それらは、シベリアのシャーマンが使うような呪術的な性質をもつものとしてではなくて、遠来の異形の民への畏怖を込めた非日常の社会性シンボル、あるいは反社会的秩序の記号としての役割を想定する必要があるかもしれない^(注2)。



図補1 ゾノクワの仮面の一例
レヴィ=ストロース
『仮面の道』1977, p.89.



図II-4 伎楽面 胡徳楽
法隆寺蔵（平安中期）
西村杏太郎, 1971, 第20図.

(4). 伎楽面との類比

伎楽面には面の本体に鼻や顎の部分を紐でつないで、舞い手が動くとき揺れ動くようにしているものがある。酔舞の曲の胡徳楽の面の鼻もそのように作られている。そしてまた、胡徳の面の中には偏鼻胡徳といって鼻が歪んで作られているものがある（図II-4）。偏鼻胡徳の歪んだ鼻は、舞い手の酔った所作にあわせて鼻がゆらゆら揺れるさまを造型的に表現したものではないかといわれている。

先にあげた、八賀（1982）の類型Iにあたる単独につくられた土製の鼻・耳・口には、

(注2) フジルの伝承をめぐる追補——北米大陸北西岸の「ゾノクワ」の説話について
「ゾノクワ」というのはヴァンクーヴァー島とその対岸のクワキツル系の部族のあいだに伝わる男または女の人食い鬼の説話である。その説話の大筋は次のようである。
ゾノクワは遠方の山地からやってきて子供を攫う。攫った子供の目は松脂で閉ざして負い籠にいれ地下に引きずり込む。ところが或る子供は抜け目がなくて、番をしている鬼女に美しくなる秘法を伝授してやるとたばかって薪の上ののせて焼き殺してしまった。子供は村へ逃げ帰ってその話をする、村の若者がゾノクワの棲処へでかけて行ってその財物を持ち帰った。その財物はボトラッチのときに彼の父親が皆に分配した。
ゾノクワの説話には幾つかの変型があるが、話の構造は北千島のフジルの説話と同型的であることがすぐに了解される。レヴィ=ストロースはゾノクワの説話を、世代の継承を妨げる反社会的秩序という記号性において読み解いている。
さらに興味深いことに、ゾノクワの仮面（図補1）は、眼窩が窪み頬がこけていて口をつむぎ、両目は眼るように半眼であるなど、形態的に「Eturatuki」（図II-2）と共通の要素を備えている。

それを何かに取り付けたと思わせる紐通しのような孔が穿たれている。そこでそれらの土製品は、布か革でつくった覆面にとりつけて仮面としたその部品ではないかと推測されている。萩内遺跡やその他の遺跡から出土した土製の鼻・耳・口は、同遺跡で発見された大型仮面土偶の鼻や耳や口と大きさも形も似ていることはさきに述べた。すなわち、布の仮面に土製の部品を取り付けたものが使われていたとすると、それを被った人物が動くときそれにつれて仮面が揺れ動いて、様々な表情をつくったに違いない。歪みの仮面はその様をダイナミックに表現したものかも知れない。

つまり、偏鼻胡徳の造型との類比でいうならば、縄文の歪みの仮面もまた、揺れ動く布の仮面が描く偶然の表情を印象的に写し取ったものであるという可能性も捨てるわけにはいかない。

Ⅲ. 考察——先史時代における仮面の意義

1. 呪術と仮面——禱りの習俗として

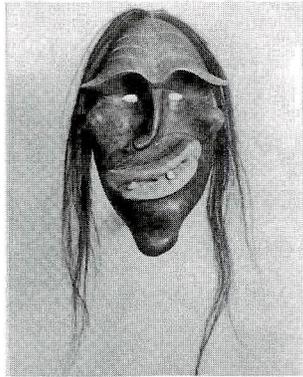
土製仮面には、死者の顔を写したような静的な不気味さをただよわせたものが多くあり、いっぽうで、歪みの仮面のような力動的な怪奇さをあらわにしたものがある。これら表現の形式は両極だが、どちらもこの世を分かち異界をあらわす点で表現機能の構造は同じだとする立場は、直観的に受け入れやすい思想である。

八賀（1982）はとりわけ歪みの仮面を、呪術者の狂躁状態を写したものであるとし、人に神が宿る究極の状態の表現であるとした。

仮面のもともとのそのような呪術的な役割意味が、次第に祭祀の儀礼として定着し、やがて護符的な意味へと移行したとしよう。八賀はその遷移の諸相が、仮面の類型が顔の前面を覆うようにとりつけることができる形式から、それが小型化して額の部分に装着したと思われる形式へ、さらに小型化し顔にとりつけるのではない飾り物としての形式へという、類型上の変化の諸相に対応すると考えている。

八賀はまた、仮面の持つ意義を、土偶の祭祀と関連させて考察している。土偶の祭祀は疫病か何かをもたらす危機的状況と関係があったとする。彼は集落遺跡の規模の増減に注目した。それによると、縄文時代前期の終わりから中期にかけて住居址が大集落化する傾向がある。ところが、中部山岳地帯においては、縄文時代後期になると海岸平野部での安定した状況にくらべて、大集落の数と集落の規模が急に減少する。その理由はたぶん病気の流行かなにかによる危機的状況があったためであり、それが土偶の祭祀の形成と不可

分の関係にある。そして、歪みの仮面もまた、北米先住民の仮面（図Ⅱ-1，図Ⅲ-1，図Ⅳ-5a）の場合と同じように疫病駆逐のためのマツリに使われたと推測している。縄文時代晩期の仮面土偶の出現は、この時代に土偶のマツリと仮面のマツリがクロスオーバーする時期があったことを示すものだと八賀は考えている。



図Ⅲ-1
イロクォイ族の仮面
Museum of the American Indian
Dockstader, F. J. 1961, plate 233

たしかに病気の流行など、それを証明する客観的な手だてはどこにもないが、先史時代において致命的な病気の流行というのはいくつもあり得ることだ。あるいはそれ以外にも、危機的状況を生み出す要因はいくつもあっただろう。地球的に気候が安定するのはこの2000年ほどの間のことであって、温度変化の推移の資料によって知られるように、それ以前は今よりも気候の変動が激しい時期であった。それは、狩猟と採集を手段とする当時の食料の確保にとって深刻に影響したであろう。

あるいは、この時代は地殻の変動が今よりもずっと荒々しい時期であった。中部山岳地方でいうならば、八が岳が形成されるのは100万年前以後5万年前のことで、歴史時代にはいつてからも888年には天狗岳の水蒸気爆発による山体の分裂と大崩落が記録されている（町田洋・白尾元理,1998）。八が岳周辺に人が住み付くのは5万年前以後で、その頃の人たちが天変地異に脅かされ続けたとしてもおかしくない。そして、この地域の中ツ原遺跡や新町遺跡からは仮面土偶が発見されている。

蒔前遺跡の自然的環境も同じだと云えよう。遺跡の西北方には十和田湖と八甲田火山群がある。十和田湖は3万年前に巨大噴火を起こしており、1万3千年前の巨大噴火で今の湖の概形ができあがった。そのときの火砕流は八戸の海岸にまで達して海に突入している（菊池清人,1984）。歴史時代にはいつてからも大噴火の記録があるように、大小の噴火の

度ごとに大量の降下物が覆い、泥流が押し出したはずである。(図I-3の地形図に見られるように、御所野周辺の谷筋は珪化木地帯になっている。)

こうして人力によってではどうすることもできない自然の威力を呪術によって克服しようとする営みがあり、やがてそこから文化的伝統としての祭祀が形をなしてきたと考える立場が成り立ってくる。

祭祀の形態が社会の構造を反映するものであることはいうまでもない。もちろん、縄文時代の祭祀がどのような形で執行されていたのか、社会の構造がどのようなものであったのかを直接に知る手だてはないが、八賀が言うように、仮面の時代ないし仮面土偶の時代に住居遺跡の大型化があったとすると、そこにはどのような形であれ何らかの社会組織が形成されていたという推測を拒む理由は見当たらない。

御所野遺跡について見るならば、尾根状の台地の上に南北50~100^m、東西2^{km}の範囲に数戸ずつかたまって、推定で全部で400戸ちかい住居が西ムラ、東ムラ、中央ムラに分かれて配置され、中央部にストーンサークル状に整えられた墓域があって各戸の出入り口は墓域の方を向いている。墓域の外側に殯屋とみられる建屋跡があり、また、ムラのはずれに集会所かと思われる巨大な建屋跡がある。このようなムラ配置の構造的な特質は、そこに何らかの社会組織が縄文後期においてすでに形成されていたことを思わせるものである。

また、岩手県埋蔵文化財センター(1981)による葦内遺跡出土の大型仮面土偶の相貌の分析は興味深い。同センターでは、この仮面土偶の相貌は、ムラの長老が仮面を着けた様子を写したものだとして推論している。その根拠は、顔に密着した仮面の外側にある下唇の下から上にくぼみながら刻まれた沈線が頬の窪みをあらわすとすればその形が高齢者の顔の輪郭を思わせること。仮面を着けているのはムラの長老で、マツリの時の神の役目を果たしたのであろうこと。そして、この仮面土偶と同時に出土している他の遺物、すなわち、トーテムポール様の柱、800を越す墓坑、欠落して埋納された耳の部分(7^{cm}ばかり離れた別の墓坑からこの土偶の耳が発見されている)などを併せ考えるとこの仮面土偶の意味、ひいてはこの遺跡の性格が自ずと浮かび上がり、大型仮面土偶が常時に集団の神として崇拝されていたものと考えられるとしたことである。

以上の議論は一つの推測にもとづくものではあろうが、おおよそ、人為をもってしては制御なしえない自然の営みに対して呪術的な禱りの習俗がおこり、やがて社会組織としての集団のなかに祭祀の儀礼として定着していくにつれて、マツリにかかわる土偶や仮面や種々の祭具が産出されてきたとするのが、これら諸説の基本的な論点である。

2. 悪霊除け

福田友之（1988）は、上尾駮や蒔前の事例に紐穴がなかったり、あっても貫通していなかったりすること、平の事例など裏面に鼻をいれる窪みがなくて着用に適さないこと、実験的に土面を作って顔に装着してみたが重さのためにずり落ちてしまっただけに役に立たないこと等の理由から、実際に顔に着ける仮面は布製か木製のものが他にあって、土製面はそれを模したものであり、顔に着けるのとは別の役割が与えられていたのではないかと考えている（注1参照）。

福田は、歪みの仮面のうち唯一出土状況が明確である上尾駮遺跡出土の土製面が墓坑の中からではなく墓坑の近傍から発見されたことを重視している。彼は北海道ママチ遺跡で墓の坑口部から出土した土製面の意義に関する大塚和義（1988）の仮説を援用して、墓坑の入り口あたりに立てた木の柱にそれを縛るか吊り下げるかすることによって墓域を象徴し、あるいは墓域を悪霊から守る役割をはたしたのではないかと推論した。1墓域から1面だけが出土したという点もこの推論を支持するし、萩内遺跡で発見されたトーテムポール様木製品（岩手県埋蔵文化財センター,1981）には歪んだ人面が彫刻されていたことも、土製の歪みの仮面のそのような役割を示唆するものではないかと福田は考えている。

金子明彦（2001b）も大筋において福田（1988）の解釈を支持している。鼻曲りの「土製品」を「土製面」とみなしたのは現代のわれわれであって、それが仮面と類似した形態を持っていたとしてもその用途は仮面とはもともと関係ないものであったかもしれぬと疑っている。そのうえで金子はこの類の「土製品」の鼻曲りの表情がそれらの用途にかかわっていると考えた。すなわち、金子の考えによると、この類の土面は目も口も見開かれた悪霊にとりつかれたような顔をしているから、それは悪霊から死者を守るというよりは、やってきた悪霊をそれにとりつかせて居住区にまで入ってこさせないようにするための、「避雷針」的な役割をはたさせたものではないか、としている^{（注3）}。

（注3）金子明彦（2001b）の組合わせ型仮面についての解釈が興味深いので引用して注記しておく。

金子は八天遺跡の組合わせ型仮面の出土状況を詳細に点検してひとつの推論を行った。彼は出土場所からそれらが墓制に関係していると考えた。

さきに述べたように、組合わせ型仮面の鼻や耳などの形状が萩内遺跡から発見された大型仮面土偶の顔面部の部位の形状に似ていること（35ページの記事）、そして、大型仮面土偶の顔面部の表情が「死仮面」に見えることから類推して、組合わせ型仮面もまた、悪霊から死者を守る「死仮面」であると考えた。もしそうだとすると、八天遺跡の同一の墓域からなぜ複数の仮面が出土したのか（鼻2、口1、耳1）を説明しなければならなくなる。

そこで金子は、その墓域の造りと伴出品の性質から被葬者が村を代表する実力者であって、実力者であるがゆえにそれに悪霊がとりついて「化けて出る」のをまわりの人達が大変におそれたと考えた。そこで彼らは被葬者を悪霊から守るために死仮面を供えた。それが複数個あるのは、災いをおそれなければならなかった人間が多数いて、彼らがあらそって死仮面を作って供えたのではないか。なぜなら、その1点1点が違うこと、しかも鼻の1個が焼成不良だったことは、埋葬にあたっての彼らの慌てぶりをうかがわすものであると推測している。

3. 変身すること

仮面の機能には、禱りと呪術に関連しながらしばしば議論される変身の役割がある。甲野（1964）は、仮面を着けた人物を、その仮面が象徴する対象に変身させるはたらきについて述べている。それは単に役割演技としてではなくて、面が顔にはりついてとれなくなってしまったなどという寓話が暗示するような、演者の全人格的な変容を指すものである。

そのことを考えるとき陥りやすい一つの陥穽がある。それは、私たちが先史時代の人々の「こころ」のあり様を、それに類比的な現代のわれわれの「心」のあり様と不用意に同一視してしまいがちだということである。先史時代の変身（それがあったとして）が、文獻的に採録された事象或いは採録されうる事象として現代の私たちがいま共有しているところの仮面劇などに言う「変身」と同じ性質のものであるのかどうか、それはついぞ知ることができない領域に属している。

はじまりのとき、
人間と動物のあいだには、
ちがいはなかった。
その頃はあらゆる生き物が地上に生活していた。
人間は動物に変身したいと思えばできたし、
動物が人間になることもむずかしくはなかった。
たいしたちがいはなかったのだ。
生き物は、ときには動物であったし、
ときには人間であった。
みんなが同じことばを話していた。

.....

でまかせに発せられたことばが
たちまちにして生命を得て、
願いを実現するのだった。

.....

説明をするとだめになる。
昔は万事がそんな風だった。

(M. ピクマル『インディアンの言葉』より)

留意すべきは、縄文の仮面の時代は、古典ギリシアの哲学が心身の対置において「精神」を発見する以前の時代にあたっている。この時期、縄文の文化と古代ギリシアの文化が何の交渉も持っていないにしても。

現代の「心」や「体」の概念は、紀元前5～4世紀以後のギリシア哲学の系譜に属する。そのため、私たちの世俗の常識もおおかれすくなかれそれに乗っ取られている部分が多い。ギリシア哲学以前の「心」や「体」についての古代の感性を、史実として垣間見ることが出来るものがあるとすると、それは紀元前6世紀後半にテキストとして整備されたとされるホメロス（B.C.9C～8C）の叙事詩をとおしてである。テキストは、吟遊詩人が語ることばにおいて選択され記憶に留められた古代の意識を表記したものである。だから、したがって文字の発現以前のそのことばを、文字の発現以後の文字表記に拘束的に展開する現代の語義と同一視して判読理解すると不都合を生じる。

たとえば「psyché」はふつう「こころ」と訳され「soma」は「からだ」と訳されているが、それは今のわれわれが用いる「心」または「体」という包括的統合的な概念を指すものではない。われわれの時代の心とか魂とかは、個人のさまざまな活動を統括する精神機能を指すが、ホメロスの時代の「psyché」は単に生命体と非生命体とをわける原理としてのみ存在する。同様に、さまざまな身体部分のさまざまな活動を統括する包括的な概念としての「体」もまた存在しない。「psyché」が留まるかぎりにおいて体のどの部分もそれぞれが生き生きと活動し、自然物もが「psyché」によって活性化された（Jaynes, J., 1976）。そのような心性においては仮面を着けたり取り去ったりすることや、そのさまを見ることは、肉体や精神の変換をいま私たちが考えるよりも容易に、より自在に起しうる契機であったかもしれないし、あるいは、変身が暗喩する記号に同化する心性はもっと自由な存在であったかもしれない。

縄文の仮面の時代もすくなくとも時間的には、ギリシアにおいて「心」と「体」が発見される以前、文字言語発現以前である。つまり、仮面の呪術的な役割についてであるにしる変身の機能についてであるにしる、それを説明するためには現代のロジックによる類比を避けて、実証的な方法が要請されなければならないということである。

4. 精霊の監視を逃れること

甲野（1964）は仮面のもう一つの機能として、仮面を着けることによって精霊の監視から逃れることをあげている。彼はそのことについてさらに詳しくは述べてはいないが、視線を避けることは、どこかから何かに見張られていると感じることと表裏の関係にある。

どこかから何かに見張られていると感じることは、他者の眼を媒介にして自分自身を監視する自我の眼そのもの——フロイト的用語にたよるならば超自我——を象徴する。この点は顔を覆うことの生命的な意味にかかわって一つの留意点であるかもしれない。

私たちの文化では、恥ずかしいとき、或いは恥ずかしいことをしたときに、手などで覆って顔を隠す。悪事を企むときも顔を隠す。古くは山法師の頭巾があるし、デンバーの博物館では先住民の仮面にまじってバンダナが陳列されていて、解説には次のようにある。「開拓時代には銀行にいくときにしばしばこのマスクが用いられた。」サングラスや車の窓ガラスの遮光シートのもうひとつの効用もこれかもしれぬ。

このようにして顔を隠すと、他人から見られていることの制約から我が身を解放することができる。それは他者の眼を介して我が身の処し方を拘束している行動規範を棚上げにして、反社会ないし非社会の振る舞いを許容することを意味している。たとえば、他人の秘事を盗み見るときに扇子の骨の間から透かして見る所作は、盗み見しているのがいかに見え見えであっても、あれを見ている私はいないよということを公言する所作である。開高健の小説に、簡易宿泊所の相部屋で夫婦者が頭から風呂敷を被って事におよぶ場面がでてくる。友人の奥さんには、温泉の湯につかって気分が良くなったのか悪くなったのかは知らないが、洗い場で女性が大の字になっていて、その彼女が手拭い一枚で隠していたのが顔だったという話を聞いたことがある。

いずれにしろ顔を隠すと自分を見る他人が見えなくなる。他人が見えなくなることににおいて他者の眼から自分を消し去る。顔を隠すはたらきは、このようにして、自己の存在を社会から消し去る効果を持っており、ひいてはこれが変身にもつながる。

縄文時代中期の遺物としてイタボガキの貝殻で作られた一面の貝製仮面が熊本の阿高貝塚から出土している。この仮面は顔がちょうどはいるくらいの大きさ（約20cm）で両目と口が丸く穿たれている。これは土製仮面以前に顔を覆う習俗が彼地にあったことを示すもので、坪井（1898）が言うように、さらにそれ以前から布や革の覆面で顔を覆う習俗があったとする考えも成り立つ。吉田憲司（1992）がザンビア共和国東部州のカリザ村を中心に長期的に定住して調査をおこなったチェナ族の仮面結社（後述）の仮面舞踊では、顔をかたどった仮面を用いるべき場面でも全面に羽根を植え込んだ覆面が用いられる事実があり、したがって、仮面の原初的な機能は顔をかくすことにあって仮面の形はさしたる重大事ではないことを指摘している。

ただ、そのように何としてでも顔を隠そうとする習俗が先史時代にあったとしても、その動機が何であったのかを直接に知る方法はない。それにもかかわらず覆面の習俗の存在

を以て、それがどのような形のものであれ、何かの形で自我を規制する超自我を生み出すような集団の力学、言を換えれば精霊の眼を意識させるような力学が当时に存在したことの証と見る事ができたでしょう。そうだとするならば、顔を覆うことに始まる覆面が、やがて布作面のように顔の造作を描いた仮面になり、土製の顔の部品をとりつけたさらにリアルな表現から、ついに土製仮面が現れたとすると、歪みの仮面の意義もまた先史時代のそれぞれの社会の枠組みの種々の位相に位置づけられていたと考えねばならぬことになる。

5. 仮面のマツリの社会的機能

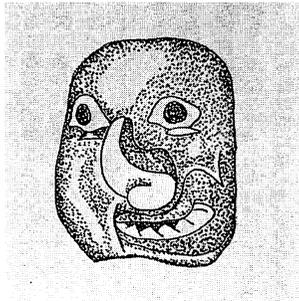
八賀（1982）は歪みの仮面を、呪術者の狂躁状態を写したものであるとした。また、大塚（1975）は、幻覚剤によって朦朧状態になった呪術者の眼をとおしてみた歪んだ視野を写したという仮説を提示した。

そのような仮説ないしは推測に対して生ずる素朴な疑問として、たとえばもし、それがトランスの状態の顔面の引きつれを写したものとするならば、容易にトランスに移れるいわゆるシャーマンと呼ばれる特異の社会的役割があったのか、シャーマン的傾向の特定の人物が選ばれて仮面を着けることが許されたのか、そのような特異の傾向を持った人物がいなくても誰かが選ばれて仮面を着けてその役割をはたしたのか、そのような特定の人物がいたとするならば、彼らは日常の生活の場面ではどのような立場に置かれていたのか。

たとえばもし、それが幻覚仮面であるとして、それならばある特定の幻覚体験をどのような方法によって仮面という作品に仕上げる事ができたのか。幻覚者と作者とは同一の人物だったのだろうか、同一人物だったとすると彼はその社会のなかで何者であったのか、もし同一人物でないとする、幻覚者は彼または彼女の体験をどのようにして仮面の作者に伝えたのか、そうだとすると幻覚者と作者との社会的な関係はどのようなものなのか、偶発的なものなのか職業的分業があったのか、あるいはそれを支える宗教的な制度があったのか。

磯前（1994）は、仮面形式の土製品（鼻曲り型土製面を含めて）の出土数が、土偶その他の土製品の出土数に比べるといちぢるしく少ないこと、かつ、縄文時代後期前半から晩期中期にかけて時間的継続のなかで九州から北海道までの広い範囲に点的に分布していることに着目して、そのわけを、仮面祭祀において仮面の数を少なく保つ必然があったためと推測している^(注4)。

(注4) スリランカのシンハラでは、仮面劇に用いられる仮面は特別な管理はされず、ときには部屋の装飾にさえ使われるが、癒しの祭祀のための仮面（図補2。これは人にとり憑いて病気をひきおこす悪霊であるとされている）は祭祀の時以外は厳重に管理されて人目につかぬところに格納されている（井狩,1982）。



図補2 スリランカ「ヘヴェニコラウ」のスケッチ
病気をもたらす悪魔をあらわす
ベドウアン、1963. p.122, 第18図

すなわち、祭祀のための仮面は、共同体自体かあるいは共同体を体現する長老によって管轄されていて、祭祀において共同体の成員を共同体（またはその体現者）に結びつけて関係付ける役割をはたした。共同体の成員は仮面をとおして共同体のアイデンティティを共有し共同体の価値規範を分与される。そのためには仮面は共同体によって独占されているべきで、そこに、検出される仮面の数の少なさを積極的な意味が見いだされると述べている。

仮面の祭祀は死と再生を象徴する。その死と再生の対象が共同体のアイデンティティの根源として成員が分有する価値規範であり、それが霊的な存在すなわち祖霊の姿をとって現れるときに仮面が要求されるというのが磯前の議論の要点である。

吉田（1992）は磯前（1994）が推論した仮面の社会的機能を確認することができるような現象的事実をアフリカに現存する儀礼行為の変身体系のなかに見いだしている。

人類学や社会学等の研究者による仮面儀礼の観察記録は数多くあるが（例 井狩弥介「仮面の眼」山城祥二（編）『仮面考』1982,78-84.）、吉田のフィールドワークはある意味でチェワ社会の成員の目からする仮面舞踊の意味理解になっているところに特徴がある。なぜなら、吉田はチェワ族の集落に定住して仮面結社に加わることを許されているからである。

チェワの仮面舞踊は近代の植民地化や、それ以前の部族の侵入と闘争の歴史に耐えて今日までチェワ固有の文化として生きつづけてきた。その理由は、仮面舞踊がチェワ社会の儀礼行為を支える機能的なシステムに強固に位置づけられていて、歴史の試練がさらにそのシステムの整合性を強化するように働いたことにあると吉田は考えている。

吉田が見いだしたシステムとは、霊媒と邪術師とそして仮面舞踊の踊り手の3者が、チェワ社会の死生観において明確に差別化されて機能的に関係しあう一つの変身の体系をな

していることを指している。

邪術師は邪術によってライオンやハイエナに変身して人を襲い死に至らしめるはたらきをする。邪術師は死者を掘り起こして食べる。霊媒はけっして墓に近づかないで菜食をとおす。霊媒は、成女儀礼と雨乞い儀礼に際してニシキヘビの霊に変身して、誕生と生をコントロールする豊饒信仰にかかわる。そして、仮面舞踊の踊り手は、仮面によってゾウに変身する。それは、死者を埋葬して霊を祖霊に返し出産間際の女性に送りどける。

人はこの体系に同化することにおいて、死と再生とか病などという衝撃的な事件を感性体験の中に消化して納得する。仮面の存在はこのような儀礼行為としての変身と憑霊の体系をかたちづくる成分の一つとしてはじめて意味を持つものである。

上述のごとき、これら磯前（1994）や吉田（1992）の諸論の立場はいずれも仮面の祭祀とシャーマニズムを安易に同一視することを排して、共同体の社会構造とそれに相互作用する祭祀の構造の中に仮面を位置づけようとしている。私たちはその点に意義を認めなければならない。

人は日常に属する共同体に同化しているので、そこに支配的な秩序や価値規範を通常は意識することはない。そのような日常に対して、祭祀やそこで起こる変身は、無意識の秩序や価値規範に挑む非日常である。祭祀の非日常は日常の無意識を意識のレベルにひきあげて共同体の成員が共有する営みである。仮面の存在意義をそうした社会の結合のツールとして認識しようとする立場に私たちは留意する必要があるだろう。

6. ふたたび鼻曲りの土製面について

私が最初に鼻曲りの仮面にであったのは10年近くも前に見た京都国立博物館編の『古面』（1982）の写真によってであった。考古学について非専門である私があるとき受けた衝撃は仮面が持つ芸術的な迫力であった。そしてつぎに起こったのは、なぜその仮面がそのように意図して歪ませて作られなければならなかったのかというまったく素朴な疑問であった。

顔を専門に描きつづけている画家の徳永 隆さん（鹿児島市在住）にお話を聞く機会があった。徳永さんの答えは「ノッてくると自然とそうになってしまうもので何も理由はない。ただ、（仏像のアルカイック・スマイルのように）美しく整って左右が対称の顔はたてまえであって、（作家にとってもモデルにとっても）人間のほんねはあらわれてはこない。」というものであった。そして創作の衝動にまかせて体を動かすと、右利きのものにとってはおのずと右（モデルにとっては顔の左側）に画像は曲がるものだというのであった。徳永さんの作品を拝見すると、顔の輪郭はかならず左右が対称でないし、作陶され

た仮面の作品は鼻が右に曲がっている。現存の鼻曲りの仮面も5例のうち4例が向かって右方向に鼻が曲っている。それはあるいは創作上の必然であったのかもしれない。

けだしその必然において歪みの造形が生まれたとしよう。生まれた造形はそれを見る者たちにとって衝撃を与え、その衝撃が歪みの造形にひとつの様式としての価値規範を固定し継承させる主要因ともなるのかもしれない。

仮面が、祖霊であれあるいは守護神であれ悪霊であれ、超越的存在としてのカミを表そうとするかぎり、それはカミがその辺りにいることを意味的に示唆する記号であらなくてはならぬ。なぜなら、カミの実在性はその非現実性にあるのだから、現実にかミ様がそこに出でてきてしまっただけでは困るのである。しかしながら、そこには演ずる人が現にそこにいるのだから、彼が演ずるカミはヒトとしての彼の肉体と無縁ではなく、だからこそ、カミに似せようとしたものがヒトの顔の形をしていたのでは意味がなくなってしまう。そこに演者と観衆との間に何かの約束ごとが取り結ばれる理由があるのだが、その約束ごとの一つとしての非対称の様式を、まさに約束ごととして固定する役割が歪みの衝撃力であったと考えることは無理ではないだろう。

鼻曲りの土製面が出土する地点は、上尾駮遺跡がかなり北にかたよっているのを除けばおおそ馬淵川の流域に局限されている。すなわちその事実は、地域固有の社会的慣習の制約のもとで、鼻曲りという特異の様式を産みだす仮面制作の技法がこの地域に継承されたということの意味すると考えねばならない。仮面の作り手はこの約束ごとに従わねばならなかった。

しかし5例の仮面は一つ一つがみな個性的であって、それらの作風は観照される形象において全く異なっているといつてよい。仮面の作り手は、仮面を作ることの目的において第一義的には伝統の束縛制約をうけながら、それと同時に創作そのものの価値に向かう高次の意図の高揚をかならず持ったはずである。そこに、継承さるべき基本形に従おうとする意志と、基本形から転調・逸脱しようとする意志との間の拮抗がある。その所産として、鼻曲りの様式にかかわりながら、さまざまな特異の個性を備えた個別の作品が、地域限定的に伝播し定着したといえるのかもしれない。

見方を変えると、たとえば蒔前の遺跡では鼻曲り型の土面といっしょに遮光器型の面貌を持った土偶が出土する。時代的には土偶は土面に先行するから、同じ地域の中で何かのかたちで遮光器型土偶の様式と鼻曲り型土面の様式とが関係しあう時期があったと考えて不都合ではない。遮光器型のスタティックな静謐さと鼻曲り型のダイナミックな陽気さという類型を異にする別途の様式を同時に見るとき、まさにその関係が重要であって、純

粹に形象としてそれを直視することが重要であるように思われる。そのいずれであれどちらかだけを単独に取り出して自然主義の評価にさらすことは無意味であろう。

そのような見方からするならば、それら仮面たちの造形はさらに縄文の装飾様式の展開の中に位置づけられねばならぬ。

装飾としての縄文は線的・無機的であって、習慣化された自然主義への傾向すなわち感情移入を拒否する。そこには、その線刻を残さなければならなかった人たちの造形の意欲そのものを見ることができる。そのことと同様に、鼻曲がり型にせよ遮光器型にせよ、その形をかたちづくった精神の役割が関心事である。したがって、造形が模した対象を推測して感情移入するのではなくて、その造形を産んだ精神の欲求を満たす行為としての芸術の始原そのものを歪みの仮面に見てとることが重要なのではないか。

IV. 供覧——さまざまの歪みの仮面について

一般に民俗学的には翁や媼は遠来の異形神を意味するとされている。能面では神格をあらわす翁面等に歪みの造形の事例が見られるし、舞楽面では安摩の二の舞の媼面が腫面と呼ばれるように、奇怪に歪んだ形につくられている。北米やアフリカ、東南アジアなど世界各地にも多種多様な異相の仮面を、さして稀にでもなく見いだすことができる。

(イ) 能面・狂言面

翁面系の面は鎌倉時代の猿楽で最初に仮面が使われ始めたときの形式を伝えていて、役柄としては地霊の象徴である。神格を表す翁面、尉面、男面などの古面にしばしば鼻曲がり型土製面に似た造形の作品を見出すことができる。

図IV-1a～fにいくつかの事例を示した。図IV-1aは岐阜白山神社の三番叟の面で南北朝から室町時代の作とされている。いわゆる歪みの三番叟の例で、その中でも型破りの造形だとされている。図IV-1bは尉面の古形に属すると考えられているもので鼻が三段に曲がっている。図IV-1cは尉面で室町から桃山時代の作とされている。図IV-1dと図IV-1eも尉面。シオフキと呼ばれる異様な表情をしている。図IV-1fは老女面で中尊寺の延年の老女舞に用いられる。

(ロ) 道令面

図IV-2は韓国で神事にあわせて催される風刺劇の仮面で、左右非対称のデザインが多い。素材は紙製か又は瓢の殻の上に紙や獣の毛を貼りつけて作られている。使用した仮面は行事が終わるとその都度焚焼される。



図IV-1a 三番叟
岐阜県 白山神社蔵
京都国立博物館,
1982, p.106, 図版90.



図IV-1b 尉
栃木県 輪王寺蔵
京都国立博物館,
1982, p.121, 図版108.



図IV-1c 尉
奈良県 天河大弁財
天社蔵
京都国立博物館,
1982, p.122, 図版110.



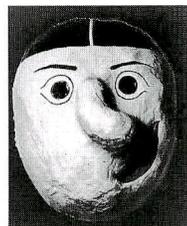
図IV-1d 尉
愛知県 熱田神宮蔵
京都国立博物館,
1982, p.126, 図版115.



図IV-1e 尉
神波多神社蔵
京都国立博物館,
1982, p.324, 図版120.



図IV-1f 老女
岩手県 中尊寺蔵
京都国立博物館,
1982, p.118, 図版103.



図IV-2
鳳山仮面劇の両班
韓国 黄海道
熊谷健二郎・他,
1981, p.65

(ハ) ジャバの仮面

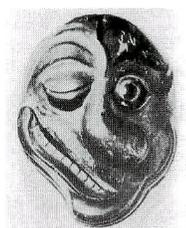
ジャバ島など南太平洋の島々は仮面の宝庫といわれている。図IV-3a は悪魔、図IV-3b は悲愴鬼、図IV-3c は役柄不明。いずれも茶、黒、赤、金などで強烈な彩色が施されている。



図IV-3a
悪魔の面
インドネシア ジャバ島
熊谷健二郎・他,
1981, p.148, 図版20.



図IV-3b
悲愴鬼の面
インドネシア ジャバ島
熊谷健二郎・他,
1981, p.148, 図版21.



図IV-3c
役柄不詳
インドネシア ジャバ島
熊谷健二郎・他,
1981, p.149, 図版37.

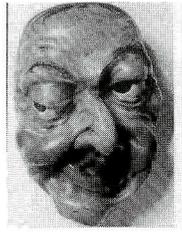
(ニ) ヨーロッパ・アルプス地方の仮面

スイスやオーストリアの山村の行事には仮面が使われる。山開きの行事にあたっては、大型の仮面を着け、木の葉の衣装をまとめて腰にカウベルをさげた神々が山をくだって村

の家々を訪れる。図IV-4a、図IV-4b、図IV-4c はいずれもオーストリア。



図IV-4a
フィスの魔女
オーストリア
谷口幸男・遠藤紀勝,
1982, 図版88.



図IV-4b
チロル地方の仮面
オーストリア
谷口幸男・遠藤紀勝,
1982, 図版95.



図IV-4c ザルツブ
ルク地方の仮面
オーストリア
谷口幸男・遠藤紀勝,
1982, 図版85.

(ホ) 北アメリカ大陸

北アメリカ大陸の先住民は様々な目的にもちいる様々な様式の仮面を持っている。ここでは、歪みの造形の代表例として、イロクオイ族の仮面結社の仮面（図IV-5a）とアラスカの先住民の仮面（図IV-5b）をあげておく。

これら製作年代も異なれば、神事、民俗行事、伝統芸能、仮面劇など、さまざまに役割、用途をも異にする仮面たちに、なぜこれほどまでに過激な左右非対称が時代や目的を超えて象られたのであろうか。

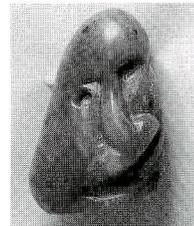
非対称の顔の左右は記号的にはこの世の二面性を表すという考え方がある。たとえば顔の半面を赤く、半面を白く彩色した仮面は生と死をあらわす。（夢で旋風の渦になやまされたカユガ族の女性はそれから逃れるために赤と白に塗り分けた面をカエデの木に懸けて供物にタバコを捧げて祈らねばならなかった。）図補3は筆者がアラスカで入手した魔よけのお守りで、片面の丸い目は太陽を、片面の三日月型の目は月をあらわし、あるいは開かれた目は豊穡や幸運を、閉じられた目は不猟や災厄をあらわす。（同じ造形は図IV-5bのアラスカ先住民の仮面にも見られる。）



図IV-5a
イロクオイ族の仮面
Miles, C., 1963, p.152,
plate 6. 38



図IV-5b
エスキモ어의仮面
Denver Art Museum
Feder, N., 1973, p.126,
plate 146



図補3 イヌ・イツ
トの護符
ソープストーン
高46ミリ幅33ミリ

生きた顔の左右非対称については古くはダーウィンがその表出的な意義を論じた。古来、相貌学による解釈も多くある。いっぽう実験心理学は、顔の左右の形の識別や不随意運動ないし意志的操作にかかる左右の優位性について、非対称にかかわる一般的な法則性を見いだしてはこなかった。

しかし、私達は日常の身体技法においては意識的にも無意識的にも顔の左右をば有効に使い分けている。このようにして顔の左右非対称は、私的なコミュニケーション手段として有用であり、公共的に映画や演劇の演技として有用であり、制度的文化的に社会性シグナルとして有用である。

歪みの仮面もまた、それがどのような意図において作られたのかにかかわらず、そこにあるその形としての非対称こそ、生きた顔の表出運動と同様に表出的である。鼻曲り仮面を右側から見たときと左側から見たときの表情のいかに異なることか。それを着けた演者の動きはその劇的な変貌をつくりだす。仮面の造形に仕掛けられた歪みの造形は、このようにして仮面と観照者の相互作用を創出する強固な鍵刺激としての機能をはたすはずである。

参考文献

- ベドゥアン, J.-L. (齊藤正二・訳) 1963『仮面の民俗学』白水社.
- 江坂輝弥 1964「土製仮面」講談社(編)『日本原始美術2』講談社, 141-144.
- 江坂輝弥 1974「土製仮面の変遷」講談社(編)『古代発掘3』講談社, 130-134.
- 福田友之 1988「鼻曲り土面考」青森県立郷土館調査研究年報, No.12.
- 一戸町教育委員会(編) 1995『事前遺跡——重要文化財指定品図録』一戸町教育委員会.
- 井狩弥介 1982「仮面の眼」山城祥二(編)『仮面考』リプロボート, 78-84.
- 磯前順一 1994『土偶と仮面——縄文社会の宗教構造』校倉書房, 60-63.
- 岩手県埋蔵文化財センター 1981「トーテムポール様木製品と大型仮面土偶」月刊文化財, 4月号, 44-50.
- Jaynes, J. 1976 'The Origin of Consciousness in the Breakdown of the Bicameral Mind.' Houghton Mifflin: Boston, Chapt.3.
- 金子明彦 2001a『ものが語る歴史4.遮光器土偶と縄文社会』同成社.
- 金子明彦 2001b「東北地方北部における縄文時代の土面」縄文時代, No.12, 119-140.
- 菊地清人 1984『浅間山の噴火と八ヶ岳の崩壊』樞: 佐久市 長野.
- 甲野 勇 1933「石器時代の仮面」ドルメン, (No.5), 24-27.
- 甲野 勇 1964「仮面の用途とその意味」講談社(編)『日本原始美術2』講談社, 172-174.
- 京都国立博物館(編) 1982『古面』岩波書店.
- 町田 洋・白尾元理 1998『写真でみる火山の自然史』東京大学出版会.
- 大塚和義 1975「縄文後期の仮面にみられる幻覚症状」季刊どるめん, No.7, 149-151.
- 大塚和義 1988「縄文の仮面儀礼」鈴木公雄(編)『古代史復元2.縄文人の生活と文化』講談社, 135-148.
- 佐藤伝蔵 1897 共同備忘録(17). 東京人類学会雑誌, (Whole No.138), 489-490.
- 東北大学文学部 1982『考古学資料図録』東北大学文学部.
- 鳥居龍蔵 1933「北千島アイヌの仮面」ドルメン, 1 (No.5), 33-35.
- 坪井正五郎 1898「石器時代の仮面」東洋学芸雑誌, (Whole No.197), 61-64.
- 八賀 晋 1982「縄文時代の仮面」京都国立博物館(編)『古面』岩波書店, 211-216.
- 吉田憲司 1992「仮面の森」講談社.

図版引用

図 I - 5, 図 IV - 1a~1f

京都国立博物館 (編) 『古面』 岩波, 1982

図 I - 8a

東北大学文学部 『考古学資料図録』 第 2 巻, p.64,J768.

図 II - 2, 図 IV - 5b

Feder,N. 'American Indian Art' H.N.Abrams:New York,1973

図 II - 3

梅棹忠夫・木村重信 (監修) 『仮面』 講談社, 1981

図 II - 4

西川杏太郎 (編) 『舞楽面』 日本の美術No62, 至文堂, 1971

図 III - 1

Dockstader,F.J. 'Indian Art in North America' NewYork Graphic Society: Greenwich, Conn., 1961

図 IV - 2, 図 IV - 3a~3c

熊谷健二郎・他 (編) 『変幻する神々』 日本放送出版協会, 1981

図 IV - 4a~4c

谷口幸雄・遠藤紀勝 『仮面と祝祭』 三省堂, 1982

図 IV - 5a

Miles, C. 'Indian and Eskimo Artifacts of North America' Bonanza Books: NewYork, 1963

—— 2001. 5 . 21受稿 ——